若年性認知症の発症段階

<事例概要>

Aさん　　53歳　　会社員

妻は4年前に病気でなくなっており、自身母83歳と14歳の娘の3人暮らし。

隣町に50歳の妹が嫁いでおり、何かと支援をしてくれている。学生時代はサッカーをしていたが、最近はしておらず運動不足の状態。高血圧症気味であるが、内服薬や入院歴もなく元気に暮らしていた。若い頃に比べると、忘れっぽくなった気はしていたが特に気にも止めていなかった。昨年の会社での健康診断にて脳ドッグで再検査の結果であったが、仕事や家庭の忙しさと本人に自覚症状がないためにそのままにしていた。

ある日営業職であるAさんは、取引先であるB会社への訪問を忘れており、同僚からの指摘にて行く事が出来た。その後も何回か同様のミスを重ねたために、Aさんは手帳に書き込むだけではなく、携帯電話のアラーム機能を使うなどして対処をする。慣れたはずの取引先へ行くのも段々と迷うようになったり、仕事が上手くいかなくなり契約などの失敗が続いたために、会社への損害を与えてしまい自信を無くしてしまう。心配した上司はAさんと話し合いをするが、「疲れているだけ」と言うだけであった。その後は夜も眠ることが出来なくなり、仕事を休みがちになる。終始暗い表情をして同じ内容の話を繰り返したり、急に怒りっぽくなったりと、以前と人格が変わってしまったようなAさんに母も娘もどう接したら良いのか思案し、妹に相談した。久しぶりに家に来た妹はAさんの変化にびっくりし、どう対応するべきなのかわからなくなってしまった。

<家族状況>